



埼玉会館（さいたま市）

2014年9月 訪問
 埼玉モダンたてももの学生レポーター
 埼玉大学教養学部 井上 智桂乃

埼玉会館は、大正15年（1926）に昭和天皇の結婚を祝し「御成婚記念埼玉會館」として設立されました。

建設計画は関東大震災により一時延期されますが、渋沢栄一が中心となって寄付を募り、公立文化施設の先駆けとしてオープン。その後建物の老朽化に伴い、前川國男設計による建て替えが行われ、昭和41年（1966年）に現在の埼玉会館が完成しました。

「人の流れをゆったりと包み込むように」という前川氏のコンセプト通りに、昔も今も多くの人が集う空間となっています。



ポイント① 打ち込みタイル

埼玉会館の外壁は、打ち込みタイル工法でできています。一般的に建物の外壁にタイルを貼る時は、コンクリートの壁を造ってから、接着剤の役割をもつモルタルを塗り、薄いタイルを貼ります。建築家の前川國男は、陶磁器のような分厚いタイルを貼るために、コンクリートを流し込む時タイルと一緒に打ち固めました。タイルにある複数の小さな穴は、タイルを固定する釘を打ち込むためにあけられたものです。タイルがコンクリートの壁と一体化しているため剥がれ落ちにくいとされています。



タイルの床によく映える褐色色の小さなイスは、外用灰皿とお揃い。

二色の網代張りのタイルと波紋状に敷き詰められたタイルの上に点字ブロック。
 しかし、タイルの特徴を壊していないところが不思議。



人の流れを生み出すために、建物を地中に沈めて、その上に造られたエスプラナード（開かれた中庭）。そのタイルは、上から見ると花が咲いているように見えるのだそう。

建物内部のホワイエでは、素敵なシャンデリアと面白い形をした柱・梁に目が留まります。外のエスプラナード同様、床にはタイルが敷き詰められています。



ポイント② 大ホール・小ホール



1階にある大ホールと小ホールの雰囲気はまったく違います。大ホールは赤を基調とした木ならではのやわらかくあたたかい造りに対し、小ホールは緑を基調とした落ち着いた色調が特徴の造りとなっています。



木造による音の響きの良さから、「音響家が選ぶ優良ホール100選」に選出されています。

大ホールの木造の壁とは逆に、小ホールのコンクリート造の壁などそれぞれの違いを見つけるのも楽しそう。

